

日本薬学会第129年会

日本薬学会
第129年会
が3月26

～28日の3日間、京都市の国際会館をメイン会場に、「創と療の伝統と革新」をテーマに開かれ、薬系大学教員、薬系大学生、製薬会社研究員などの薬学研究者約1万人が集い、43テーマの一般シンポジウムが行われたり、過去最高の一般演題が発表されたりするなど、熱い討論が繰り広げられた。さらに研究成果だけではなく、薬学の未来や学会の将来展望に関するシンポジウムも話題となった。

1万人規模の参加者、京都に集結

一般演題数は過去最高

これまで、大学院生や研究者らで会員構成されてきた薬学会は、年1回、3月下旬に開く年会を最大イベントとして開催するなど、薬学領域の学術団体として長年、運営されてきた。ただ、ここにきて薬学部は医療薬学重視の教育改革が行われ、研究する学生や大学院生が極端に少なくなり、年会自体の開催や、会員減少による組織の弱体化が危惧されている。

その対応策として、全国に8支部ある活動

を活性化させるなど、学会の活性化を図ろうとしている。

活性化策の1つとして、今年の年会から、28日土曜日の最終日に薬学会非会員であっても、薬局や病院で働く現場の薬剤師、薬系学部学生も参加できる仕組みを取り入れ、医療薬学向けの演題を集約させるなどの工夫をした。



現場の薬剤師にも門戸広げ

る研究の役割も示したが、私立大学にとって生命線となる国試合格率の引き上げ対策などで、「研究に情熱を傾けられる余裕のある学生が、どれだけ存在するかは疑問。ますます研究に割く時間が減少する」と、本多氏は理想と現実の間で揺れ動く心境を吐露し、卒前での研究活動の難しさを指摘した。

「疾病は薬によって治癒する。患者を見て病気を理解し、薬の適正使用に寄与することが今後の薬剤師には強く求められる」と前置きしながら、「そのためには、基礎科学をはじめとする多くの知識が必要。真の意味で社会に認知される薬剤師になるには生涯が勉強で、大学はそのサポート部隊になる必要がある」との考えを示し、Science（科学＝大学）とPractice（実践＝現場）の調和の取れた融合が今後ますます必要になると強調。卒後の協力体制の必要性を強く訴えた。

高校生を対象に
ジュニア向け講演会

年会の開催に先立つ前日の25日には、薬学の魅力が高校生に薄れつつある現状を踏まえて、高校生対象に「ジュニア向け講演会」を薬学会として初めて企画した。

企画した京都大学大学院薬学研究科教授の松崎勝巳氏は、薬学から創薬分野に進む人材



理事会企画シンポ

星薬大・本多氏

新制度の薬学教育がスタートして3年が経過し、課題も見え始めてきたことから、今後の薬学界展望の議論の一助とするため、理事会企画シンポが設けられた。

同じ薬学部でも国立大学と私立大学とでは、研究や教育に対する考えや状況が異なる。星薬科大学教授で有機合成が専門の本多利雄

氏は、私立大学の教育や研究の現状を私見も交えて紹介した。

薬剤師国家試験は薬学部を卒業しないと受験できないことを踏まえて、本多氏は「薬剤師を育成しなければ薬学部とは言えない」と指摘。「では、どのような薬剤師を育てるのか。薬剤師は本来、研究者であるべき。6年制学生でも創薬

の知識は持ってしかるべき」との考えを示した上で、「薬剤師として創薬研究者が輩出されることに違和感はなく、研究心を持ち続けながら薬剤師業務にも取り組むべきだ」と語った。ただ、現状の私立大学6年制の学生から、創薬研究者を輩出するのは問題点も多いとも指摘した。

薬学における研究の重要性や、教育におけ

今後の
薬学界
大学と現場の融合必須



マツモトキヨシ

人が創る、
マツモトキヨシ。

薬剤師(新卒・中途)募集中!

株式会社マツモトキヨシ
〒270-8501 千葉県松戸市新松戸東9-1
問合先:人事部採用課
学生専用フリーダイヤル **0120-047-300**
<http://www.r-matsukiyo.com/>

